

初期仏教々団における危機意識

一

香 川 孝 雄

二千五百年の仏教々団史を通じて考えられることは、殆んど常にといい得る程、屢々危機意識が附随している。それは早くも仏教の創始者釈尊在世中に於いてさえ見られ、仏滅後においては勿論、教主を失つた空虚な気持から危機の意識は一層深刻であつたろう。数次に亘る仏典結集も実にその一つのあらわれと見ることが出来る。更に、中印度ガンヂス河流域の一角のみに限られていた仏教の版図を殆んど全印度に拡げ更にアフガニスタン、イラン方面へも伝導使を送つて仏陀の教を四方に弘め、日の出の如き勢を示した阿育王時代の仏教ですら、サールナート、コーサンビー等の石柱法勅にも見られる如く、破僧伽の危機を訴えている。或は亦、ブシヤミトラ王やエフタル民族によつて仏教寺院が破壊せられ、僧尼が殺害されたと言う如き受難も言うまでもなく危機である。以上はすべて印度の仏教に関したことであるが、シナや日本の仏教史を見ても幾多のこの様な危機意識が僧尼によつて感じられている。その危機の原因がたとえ何であるにせよ、何んとか耐え、或は却つて其の中から新しい芽を出して仏教は二千五百年の命脈を保つて来ているのである。翻つて今日の仏教々団を見る時、どの宗派も危機に臨んでいると言えよう。この危機をどう乗り切るか、又、この危機よりどの様な新しい芽を出す

べきかは今日の急務であるが、茲では過去の歴史を顧て特に初期の仏教々団に於いてはどの様に危機が意識せられていたかと言うことを検討して見たい。尙、教団の危機については内部よりと外部よりの二に大別出来るが、今は教団内部の事情より起る危機意識に限定する。

二

教団内部の事情よりする危機意識としては種々の場合が考えられるのであるが、その二、三の事例を挙げて見よう。

仏陀の教団にとつて最も大きな事件は、釈尊の入滅であろう。日頃、絶対的に信頼もし、よりどころとしていた釈尊が入滅せられることは扇の要を失うに等しき危機であつたであろう。それにからむ有名な①律の伝説がある。

仏滅後七日程した時、大迦葉が五百の弟子を率いて葉波 (Pāvā) 城より俱尸那 (Kusināra) 城へ行こうとする途中、一人の裸形外道に遇つたので仏陀の消息を尋ねたところ、既に入滅せられて七日も過ぎたことを教えてくれた。これを聞いた弟子の中には、世尊の入滅の早いのを歎き悲しんだもの、よくその悲に耐えて諸行無常の理を悟つたもの等、色々であつたがその中の一人、善賢 (Subhadrā) と名付ける弟子は、「今迄、『かくせよ、かくすべからず』と口やかましく訓誡した世尊の亡くなつたことにより、爾後はその様なわずらわしさもなく自由に振舞うことが出来る」と言つて却つて喜んだのを大迦葉は見て、仏滅直後ですら、この様なことを言う弟子があるとすれば年月が経つて後の教団内部の乱れは察するに余りあると考へて仏骨葬送の後、直ちにすぐれた仏弟子五百人を選んで律と經の結集を行つたと言われる。この伝

説の歴史的眞偽は兎も角としてこの様な事態は確かに想像することが出来る。右は才一結集の伝説であるが、その後、数次に亘つて行われた結集の行われるに至つた動機はつまり教団内における教法、律の異義を統一せんとする企てである。又、事実その様な異義より部派の分裂も起つていたのである。しかし部派の分裂は恐らく真面目な教法に対する意見の相違によつて起つたものであろうかと考えられるのであるが、そうではなしに先の葉波の如く僧侶の墮落より招く危機が一層重大であることは現存する經典や律の中にも見うけられるのである。次にそのことについて触れて見よう。

三

パーリ増支部才五には正法衰滅について五つの理由を挙げてゐる。即ち

比丘等よ、これらの五法は正法の混乱隠没を招くものである。五法とは何であるか、茲に比丘が尊敬して法を聞かず、尊敬して法を暗んぜず、尊敬して法を受持せず、尊敬して受持したる法の義を研究せず、尊敬して義を知り、法を知り、法に従つて行わない、この五法は正法の混乱隠没を招くのである。(一五四)

比丘等よ、これらの五法は正法の混乱隠没を招くものである。五法とは何であるか。茲に比丘が経、偈……乃至方広の法を暗んじない。又、聞けるが如く法を広く他に説かない。又、聞けるが如く暗んぜるが如く、法を広く他に教えない。又、聞けるが如く暗んぜるが如く、法を心をもつて屢々観覺せず、意を以つて調べない。(一五五)

又、これらの五法は法の混乱隠没を招くものである。五法とは何であるか。茲に比丘が誤つて組まれた文句を以つて経を間違つて取り、又、誤つて組まれた文句を以つて義が明らかならず、比丘が悪語であり、悪語の理由によつて忍なく教を善く取らない。多聞にして阿含に通じた法の受持者、律の受持者、論母の受持者が尊敬して経を他に説かない。彼等の死後、経は根が切れ保護を持たない上座の比丘は、贅沢にして遅緩、墮落に先行し遠離に努力せず、未だ達せざるものに達し、未だ到らざるものに到り、未だ実現せざるものを実現するため、勤勉ならず、彼等の後の人々もそれに慣う。又、僧伽が和合を破り、互に謗り、互に非難し、互に争い、互に離れ去り、信なき者に信を生ぜしめず、信ある者の一部を信を離れしめる。この五法は正法の混乱隠没を招くものである。(一五六)

右の文は、要するに法の理解に、或はたとえ理解してもその法を他に説くことに真剣でなく徒らに諍う当時の僧侶達を歎いたものであり、このままでは正法の隠没を招くことを憂えたものである。

四

法滅の五法に関するものは、律にもあつて、先のパーリ増支部の文では主として法に対して真剣でないことを指摘しているが律ではよく似た文ではあるが戒を保たず、律を守らないことが法滅の五法に加えられている。即ち②四分律によれば、

有五法令正法疾滅。何等五。有比丘不諦受誦。忘忘誤。文不具足以教余人。文既不具。其義有闕。是為才一疾滅正法。復次有比丘。為僧中勝人上座。若一國所宗。而多不持戒。但修諸不

善法。放捨戒行。不勤精進。未得而得。未入而入。未証而証。後生年少比丘。做習其行。亦多破戒。修不善法。放捨戒行。亦不勤精進。未得而得。未入而入。未証而証。是為才二疾滅正法。復次有比丘。多聞持法持律持摩夷。不以所誦教余比丘、比丘尼、優婆塞、優婆私。便命終。彼既命終令法斷滅。是為才三疾滅正法。復次有比丘。難可教授不受善言。不能忍辱余善比丘即捨置。是為才四疾滅正法。復次有比丘。意鬪諍共相罵詈。彼此諍言口如刀劍。互求長短。是為才五疾滅正法。

この文は先のパーリ増支部の一五六に極似しているが持戒、持律、精進、忍辱等が附加せられている。これは教団の秩序が保たれずに乱れることによつて正法が破滅することを強張しているものと見られる。この様な文は③四分律の中、他所にもあり十誦律にもあるが、いずれもパーリ増支部の文によく似たもので、多少増広を加えたに過ぎない。

五

更に注意すべきは、女人の出家に対して、異常な程の危機を感じていることである。④それは釈尊が姨母、波闍波提の出家の懇請に対し、女子の出家を好まなかつたが、重ね重ねの懇請に遂に比丘尼は特に八敬法を守るべきことを約して許可したと言う伝説による様であるが、それが後に正法は千年住することになつていたが女人の出家で五百年減じて正法止住は五百年になつたと言われる様になつた。⑤例えば⑥パーリ増支部の才八、才五十一経によれば、

阿難よ。若し婦人が如来所説の法と律に家より出でて家なきに出家せざれば、梵行は永く確立し、正法は千年止住せしなるべきに、阿難よ。婦人が如来所説の法と律に出家せしに依

り、梵行は永く続くことなく、正法は五百年止住すべし。

と説かれている。これが正法五百年説の⑦起源であろうとされているが、又、後には、一旦女人の出家で正法は五百年となつたが八敬法の制定により再び正法は千年住することになつたと言ふ説も現れている。それは⑧婆沙論才一八三に出る有余師の説で、

有余師説。此依若不行八尊重法密意而説。謂若度女人出家、不令行八尊重法者、則仏正法應減五百歲住。由仏令彼行八尊重法故。正法住世還滿千歲。

これは女人の出家により、教団内において男女間の風紀が乱れることを恐れたこともあるうし、又、当時の極めて女性の地位が低かつたインドの風習にもよつたのであろう。それでは八尊重法と言ひ八敬法とも呼ばれるものはどんなことかと言へば、

一、受戒後百歳の比丘尼たりと雖も、新に受戒せる比丘に対して礼拝起迎すべし。

二、比丘尼は比丘なき処に於て夏安居すべからず。

三、比丘尼は半月毎に聖日教授の時日に関して豫め比丘の示教を受くべし。

四、比丘尼は安居の後、僧衆の前に於て、見、聞、疑、三事の罪を請うべし。

五、比丘尼、僧殘の罪を犯せば、比丘比丘尼二部の僧衆の中に於て摩那埵 (Manatta) を行ふべし。

六、比丘尼は初め沙彌尼として六戒を学ぶこと二年の後、比丘・比丘尼二部の僧衆中に於て具足戒を受くべし。

七、比丘尼は比丘を罵るべからず。

八、比丘尼は比丘の罪を検挙するを得ずと雖も、比丘は比丘尼の罪を検挙するを得べし。

の八であるが、この様に列挙して見ると、男女間の問題よりも、男尊女卑の面が強い様であり、比丘尼は具足戒を受ける迄に沙彌尼として六戒を学ばねばならないことや殊に才八の場合は比丘尼には非常な差別待遇である。

六

以上述べ来つたところで大体初期仏教々団における内部の問題よりする危機意識については一応触れ得たことと思う。大乘仏教成立の頃になれば仏滅後五百年の教団は像法である^⑨とか、或は活命利養の為に塔や仏舎利の供養のみを行つて修身、修心、修戒修慧をなさない^⑩とか言うことが問題となつているが、その根本は右にあげた事柄に起因していると思つて差支えない。最後の女人出家の件は男女同権の現在では問題はないが、教法を護持し伝道しないこと、戒律を守らないこと、内部で諍うことの三点は、時、処が異ると雖も正法を破滅に導く一大原動力たることは疑のないところである。現在の各宗教団の内部事情を見る時、筆者はこの三点が悉く当てはまる様な気がしてならない。全く耳の痛い話である。若し当つていなければ幸であるが。

註

- ① *Culla Vagga II*, 善見律一 五分律三〇 摩訶僧祇律三二
 ② 四分律 毘尼增一(大正藏二二、一〇〇六 b | c)
 ③ 十誦律 增一法(大正藏二三、三五八 b | c)

- 四分律 毘尼增一（大正蔵二二、一〇〇七 c）
- ④ *Culla Vagga* X, 1, 五分律二一九
- ⑤ 中阿含二八 五分律六、二九、毘尼母經三 婆沙論一八三等
- ⑥ 南伝大蔵経二一、一九四以下
- ⑦ 印度学仏教学研究IV, 2. 山田龍城氏稿「末法思想について」
- ⑧ 外にこの説を挙げるものに善見律毘婆沙一八がある。
- 婆沙論一八三（大正蔵二七、九一八 a）
- ⑨ 大智度論八八（大正蔵二五、六八一 b）
- ⑩ 大宝積経八九、摩訶迦葉会（大正蔵一一、五〇七 b 五一—c—五二二b）
- 仏蔵経（大正蔵一五、七九三 a）

（一九五九、二、二四）